

4. 人 事

4.1 一 般

明治9年9月から開始した札幌の気象観測は、札幌農学校教師ホイラー及び同僚教師とその関係者によって行われていたが、明治11年1月から福土成豊が観測に従事するようになった。福土は函館気候測量所の初代所長で、明治8年2月から札幌の開拓使本庁民事局測量課の筆頭として在勤し、測量に従事していた。明治11年4月、ホイラーの後を受けて責任者となるが、後の札幌測候所では、ホイラーを初代、福土を2代目所長として取り扱っている。

明治10年10月、開拓使は、以後の北海道における気象観測は、すべて札幌で実施しているアメリカ式（スミソニアン観測法）に統一することを決め、函館気候測量所およびすでに開設を予定していた留萌・根室の観測所の関係職員3名に対して、同年11月から約3か月余りの間、ホイラーによる研修を行っている。ホイラーは明治11年の札幌農学第2年報で次のように報じている。

「客年11月ヨリ3名ノ少年（原文は young men）ハ任ニ其三観象場ニ赴クノ前ニ於テ施行法ノ教ヲ受ケンナリ。」

気象観測技術の教育は開拓使の依頼によりホイラー自身が担当していたことは、次の書簡からもうかがわれる（以下3通の書簡はこの章担当の串崎の訳）。

「開拓使小書記官 折田平内殿 明治11年3月18日
星野氏（のちの初代根室測候所長）は札幌測候所における作業体系に従って、3か月以上にわたって気象観測に必要な計算及び付随する記帳について実習教育を受けました。このようなクラスの観測所における観測と計算の方法を理解しています。 敬具

雇 W. ホイラー」

ホイラーが一時帰国するに際して、札幌での観測の継続を配慮した書簡もある。

「開拓使大書記官 調所広丈殿 明治11年3月23日
謹啓 私自身の観測を測量課の木村氏が計算した1月及び2月の気象観測表（写真2）を、ここに提出いたします。私が間もなく出発するについては、この間、札幌測候所は測量課の福土氏（1月から観測に従事していた）か、彼の監督の下にある有能な補助者に管理させていただきたい。（以下略） 敬白

雇 W. ホイラー」

REGISTER OF
METEOROLOGICAL OBSERVATIONS
FOR THE MONTH OF January, 1878
Place of Observation,
"Kio Koujin" Sappers
Japan.
Compiled by W. Wheeler
Observer, W. Wheeler
Sapp. Agl. College.

写真2 明治11年1月の札幌気象観測表の表紙。
ホイラーの自筆によるもので、観測場所は旧本陣となっている。

続いてホイラーの後任観測者に木村を、管理者に福土を推せんして、次の書簡（写真3）を提出している。

「日本。札幌。1878年（明治11）3月27日

開拓使大書記官 堀基殿

謹啓 木村氏は約3か月の気象観測と計算の方法について指導を受け、これらに習熟しています。私がこの仕事から現在退くについては、観測者の選択と同時に、今後の管理処置を測量課の福土氏に委任したいと存じます。 以上

雇 W. ホイラー」

このあと、明治11年4月から、福土はホイラーの後を継いで所長となり、翌12年3月には、木村が3代目所長となっている。

明治12年以降の札幌測候所には、職員7～9名（臨時を含めて）が配置されていたが、同16年11月、札幌測候所から東京気象台あてに送った業務報告には次のように記載されている。

「第5条 詰員及職務

Sapporo, Japan
March 27th 1878

His Excellency, Major,
Iritakun Daishiokubwan
Sir:- I have the honor to state
that Mr. Kimura has received
instruction during about three
months in the methods of making
and computing Meteorological
Observations, and is familiar therewith.
In view of my present return
must from this post I am pleased
to commend my further management,
together with the selection of Observers,
to Mr. Fukuzi of the Survey
Department. I have the honor to remain,
Sir, your Obedient Servant
Wm. Wheeler

写真3 明治11年3月、開拓使に宛てたホイラー直筆の書簡
(北海道大学提供)

1. 主務者ハ雇木村仲三、観測兼事務ハ雇熊谷政房、久慈確郎、村田太郎ノ三名ナリ。」

この業務報告によると正規職員は4名で、このほかに臨時の職員がいたものと思われる。以後、正規職員の数
は、明治19～20年4名、21～23年5名、24～25年6名、
27年7名と逐次増員されている。この時代の官職は技
師・技手・雇員に分類されていたが、明治24年8月に雇
員は雇と改称された。

明治28年10月には、勅令で地方測候所職員の名称・待
遇・任免及び等級等の件が裁可された。そのなかで、地
方測候所長は道府県官吏の職員で、技手をもってあて、
待遇は判任文官相当とする、また、その任免は道府県の
首長（長官・知事）に委任することなどが定められた。

明治34年4月、勅令で技師は奏任文官の5等から8
等、技手及び書記は判任文官の1等から5等までと規定
され、北海道でもこれに準ずることになるが、北海道の
測候所に技師や書記が配置されたのは、これより数年後
からと推定される。

大正10年6月22日、文部省令により地方測候所職員の

定員が制定され、北海道では技師10名、技手50名、書記
10名となった。

札幌測候所では、大正13年から国営に移管される昭和
12年までの職員数は、測候技師1名、測候技手5名前
後、書記1名、測候技術員1～2名の計8～10名ぐら
いであった。

昭和12年、中央気象台札幌支台が設置され、道立札幌
測候所の事務が逐次引き継がれることになり、10月28日
付で所長 八鍬利助以下全職員が札幌支台の事務を囑託
された。翌13年、道立札幌測候所が廃止されると同時に、
気象技師1名、同書記1名、同技手5名、雇4名の計11
名が、中央気象台札幌支台の職員に転属された。このと
き、札幌を除いた残りの道立測候所の職員数は、技師9
名、技手50名、書記8名となっていた（雇は不明）。

この後、太平洋戦争が進展するころには、管区気象台
長以下、幹部技師は軍の囑託に任ぜられている。

終戦後の昭和23年1月における北海道全体の定員は
514名、うち札幌の定員は160名であったが、その内訳は
次のとおりである。

	1技	2事	2技	3事	3技	雇員	備人	計
定員	1	1	4	10	40	90	14	160
現在員	1	1	4	7	32	126	10	181

(注) 事は事務官、技は技官、2事は2級事務官、雇員は嘱託を含む。

昭和24年度に行われた行政整理終了後の、札幌における職員数は次のようになった。

	1技	2事	2技	3事	3技	雇員	備人	計
定員			51			82	6	139
現在員	1	2	6	11	35	84	7	146

国家公務員としての官職、任免、給与、服務、身分、保障などの根本基準を定めた国家公務員法は、昭和23年7月から実施されている。

昭和27年に、中央気象台は気象災害、民間航空の再開など気象に対する社会の要求に対して、現在員でどう対処するかで、観測回数、勤務制をはじめ、あらゆる面を検討の結果、同年10月6日付で新定員(通称B案)が決定された。この結果、北部管区全体の定員は416名、うち札幌の定員は162名となった。

昭和29年以降34年までの、札幌管区気象台の定員増減は次のとおりである。

- 29年6月 無線交信、管理要員 各1名減
- 30年7月 放射能観測 1名増
- 34年7月 賃金職員の定員化 6名増

この結果、34年7月現在、札幌の定員は167名、北海道全体の定員は431名となった。

次に、昭和35年6月1日の管区定員査定委員会(前出)の答申により、同年8月に実施した管内各課の定員と昭和50年4月現在の定員を、その間の増減と共に示すと、次のとおりである。

	昭35.8				昭50.4		
	昭35.8	昭50.4	増減		昭35.8	昭50.4	増減
総務課	28	25	-3	会計課	18	16	-2
業務課	11	10	-1	予報課	27	30	+3
観測課	13	28	+15	高層課	17	16	-1
通信課	29	30	+1	調査課	15	10	-5
測器課	9	9	0	(管内計)	167	164	-3

増減の経過をみると、レーダー業務、農業気象業務、地震津波業務等の整備拡充による観測課の増員及び防災

気象の整備による予報課の増員が目立つほかは、昭和43年から始まった数次の業務整理に伴う清掃業務の外注、管理業務を中心とした事務簡素化、パンチ作業の外注及び昭和48年4月に実施された72案勤務制・定員再配分による減員が主なものとなっている。

昭和26年以降、主な年の管内各課の実員は、次のようになっている。

	昭和26年	29年	39年	44年	49年
総務課	23	22	29	26	25
会計課	18	16	18	18	17
業務課	9	9	10	10	10
予報課	28	27	30	31	33
観測課	33	30	19	20	24
高層課			17	17	17
通信課	20	31	30	30	32
調査課	10	14	13	13	10
測器課	8	8	10	10	10
管内計	149	157	176	175	178
管区計	不詳	411	531	561	586

4.2 歴代の官署長とその在任期間

開拓使・三県時代(明治9年9月～)

氏名	期間
ウィリアム・ホイラー	明治9年9月～
福士成豊	11年4月～
木村伸三	12年3月～

北海道庁時代(明治19年2月～)

氏名	期間
久慈確郎	明治20年4月～
平野保作	24年11月～
矢島新之助	25年9月～
山部亦三	26年11月～
梶沼長三郎	31年5月～
小島友義	33年2月～
豊蔵彦吾	35年4月～
阿部幸次	37年6月～
豊蔵彦吾	40年11月～

(大正14.5.18～同年9月は欠員)

梶沼長三郎	大正14年9月～
根本広記	昭和5年4月8日～同7年7月21日 (昭和7.7.22～8.7.11は欠員)

八 鍬 利 助 | 昭和8年7月12日～

以上は札幌測候所長として在任。八鍬は昭和12年10月から、所長兼中央气象台札幌支台長事務取扱となり、翌13年7月1日から正式に札幌支台長となる。この時点で札幌は国営に移管され中央气象台時代に入った。以下は札幌管区气象台長の氏名と在任期間を示す。

中央气象台時代（昭和13年7月～）

氏 名	期 間
八 鍬 利 助	昭和14年11月1日～17年6月14日 (札幌支台長に引き継ぎ)
佃 十 吉	17. 6. 15 ~ 20. 5. 30
八 鍬 利 助	20. 5. 31 ~ 21. 3. 29
肥 沼 寛 一	21. 3. 30 ~ 27. 2. 28
柴 田 淑 次	27. 3. 1 ~ 31. 6. 4
山 岡 保	31. 6. 5 ~

気象庁時代（昭和31年7月～）

氏 名	期 間
山 岡 保	~ 38. 3. 25
北 岡 龍 海	38. 3. 26 ~ 39. 3. 30
神 原 健	39. 3. 31 ~ 43. 3. 30
高 橋 浩 一 郎	43. 3. 31 ~ 45. 3. 30
毛 利 圭 太 郎	45. 3. 31 ~ 48. 3. 31
須 田 建	48. 4. 1 ~ 49. 3. 31
増 沢 讓 太 郎	49. 4. 1 ~ 51. 3. 31
伊 藤 宏	51. 4. 1 ~ (現台長)

4.3 ホイラー、豊蔵彦吾その他の人々

北海道における百余年にわたる気象事業に貢献した人々が多い。特に隠れた陰の功労者があったことも忘れてはならない。北海道庁時代までの札幌測候所に直接関係した著名な人だけでも、ウィリアム・ホイラー、福土成豊、木村伸三、水科七三郎、梶沼長三郎、山部亦三、豊蔵彦吾、阿部幸次、根本広記などが挙げられるが、ここでは、その代表として、札幌測候所の創始者であるホイラーと、所長として最も長期間在任した豊蔵彦吾の略歴を記述するだけにとどめる。

ウィリアム・ホイラー（気象百年史より引用）

1851年12月1日アメリカ合衆国マサチューセッツ州コンコードに生まれた。1871年、同州立農科大学土木工学コースを卒業。土木技師として設計監理に従事していたが、札幌農学校の開校に際し初代教頭クラークの推挙を受け、明治9年（1876）7月31日、教授として札幌に着任した。

当時25才の若き俊英は、英語・数学・土木工学の講座を担当する傍ら、北海道の農作物、家畜の選択などの基礎資料を得るため、自分の宿舍（教師館）で、明治9年9月から1日3回の気象観測を始めた。これが札幌測候所の創業となるが、明治10年4月、クラークの後任として教頭になり、同12年12月に期間満了で帰国した。その間、北海道の交通輸送の改善、道路・橋梁の土木工事等に功績があり、有名な農学校演武場（時計台）は彼の提案によるものである。帰国後は故郷のコンコードで土木技師の業務に復帰。1932年7月1日、80才で没。

豊蔵彦吾

明治三年四月二十二日、上総国沼津郡久留里（現在の千葉県久留里町）で黒田藩士の子として生れ、明治20年12月13日、北海道庁地理局に測候事業伝習生として採用された。以後、大正14年5月18日、札幌測候所の所長室で執務中死亡（55才）するまで気象界にあった。

豊蔵は明治21年7月の上川測候所創設にあたり札幌測候所から転任し、苦難の創立業務にあたったのをはじめとし、在職中、指導的な立場にあって、北海道の気象事業に尽した功績は大きく、大正13年3月には正6位に叙せられている。

彼の行った調査研究は、「樽前山噴火」、「胆振、渡島地方の稲作調査」、「渡島地方の風と稲作との関係」、「本道附近の潮風と気候との関係」、「地中温度の観測」、「気圧と本道の天気」などである。このほか、北海道の経済を大きく左右するにしん漁に対し、海洋気象観測によって潮流や水温からしんの回遊状況を明らかにし、「にしんの神様」とまでいわれ、北海道帝国大学水産専門部の講師を兼ねたこともあった。このようなことから、にしんの漁期になると、測候所及び自宅には回遊状況の御託宜を仰ごうとする網元が絶えなかったという。

(佐藤義彰)